

表通り
裏通り

さようなら、古谷東小学校



3月26日の下校風景
4月からは、古谷小学校に登校します



会場全体で歌った校歌。歌い終わると自然と拍手がわき上がりました（閉校式）



教室に戻っても涙はあふれてきました（卒業式）



在校生の見送りに笑顔の6年生（卒業式）



最後に泉校長と握手（修了式）

古谷東小学校が三月三十一日で、二十二年の歴史に幕を下ろしました。同校で行われた二月二十八日の閉校式、三月二十四日の卒業式、二十六日の修了式を通して、母校との別れを迎えた子どもたちの様子をご紹介します。

閉校式には、在籍する二年生から六年生までの六十七人をはじめ、来賓など三百人を超える方が集まりました。校歌斉唱では、子どもたちだけではなく、出席した皆さんからも歌声が聞こえてきます。卒業生や歴代の教職員の皆さんにとって恐らく、校歌を歌うのは最後の機会。さまざまな出来事を思い出しながら、歌っていたのではないのでしょうか。

卒業式では、別れのことばとして、六年生が一人ずつ学校生活の思い出や両親・友人への感謝のことばを発表。「最後の卒業生として、誇りを持って卒業します」と六年生全員が力強いことばで締めくくりましたが、式が終わると六年生の多くは、仲間との別れ、さまざまな思い出、学校がなくなるさみしさから、声をあげて泣いていて、近寄り難く感じられました。

いよいよ、古谷東小学校最後の日。修了式は、保護者の皆さんを招いて行われ、泉和好校長がひとりひとりに「古谷小学校に行っても頑張ってください」と声をかけ、修了証を手渡しました。お別れに泉校長は、「怒」ということばを子どもたちに送りました。怒とは思いやりのことで、優しく温かい心を持ってほしいという願いを込めた、最後の話でした。

下校の時間、思い出のつまった学校との別れの時です。もう、子どもたちに涙はありません。古谷東小学校での思い出をしまい、四月から始まる古谷小学校での生活に、期待をふくらませていました。



110番の家の皆さんは、スタンプを押しながら、子どもたちに「気を付けてね」と優しく声を掛けていました

子ども110番の家を巡って

3月8日、北部地域ふれあいセンターで「北・ふれあいまつり」があり、開催に先立ち「地域の安全・笑顔みつけ隊スタンプラリー」が行われました。この催しは山田地区内の子ども110番の家を巡ってスタンプをもらいながら、ゴールのまつり会場に向かいます。「110番の家の方と、子どもたちや保護者が互いに顔を合わせることができたのは、もしもの時のことを考えるとよかったです」と山田地区育成会連絡協議会会長の佐藤恵美さん（山田）。

地域を回り、災いを防ぐ

市指定無形民俗文化財・芳地戸のふせぎが、3月20日に尾崎神社（笠幡）で行われました。ふせぎとは、悪魔払いのことで、享保6年（1721）に流行していた疫病を防ぐために始まったといわれています。当日は地域の皆さんが、午前中に辻札とみこしを作り、午後から同神社を出发。約3時間かけて、地域の家を回りました。



子どもたちもいっしょに回りました。手に持っているのが辻札



列に続くみこし

ことしの「小江戸川越春まつり」始まる

3月22日に小江戸川越春まつりが始まり、オープニングイベントが一番街周辺などで行われました。木遣り・はしご乗り、マーチングバンド、カラーガード、川越藩火縄銃鉄砲隊の演武、民踊流しなどの催しが、訪れた皆さんを楽しませていました。5月8日（金）までの期間中、小江戸川越縁日大会・小江戸川越スタンプラリーなどが行われます。



「つばさ」の横断幕の下で演技を披露する川越女子高校カラーガード部の皆さん

した。「家は代々この仕事をしていて、私自身も仕事が好きで、家業を継ぐつもりでいました」と横溝さん。仕事を始めた昭和二十一年ごろは主に、農具や荷車の車輪・車軸などを造っていました。四十年ほど前、喜多町の山車の車輪の修理をしたことがきっかけで、川越まつりの山車の車輪・車軸の修理や制作を行うようになりました。現在までに、二十台以上の山車に横溝さんは携わっています。その中で、昭和五十七年に完成した脇田町の山車は、制作者の一人として作業にかかわり、横溝さんにとって忘れられない仕事の一つです。今後について伺うと、「父も祖父も八十歳を超えても現役で仕事をしていました。私も体力が続くかぎり、仕事を続けていきたいと思っています」と話していました。



横溝さんが制作した山車の車輪と共に

横溝さんは、昨年初雁賞を受賞した一人です。六十一年以上にわたる、木工製品製造に携わってきました

横溝長壽さん（77歳・南通町）

かわごえ川越びと